

今回は、マガモ猟に関わる調査の報告です。

◇ マガモ猟に関わる聞き取り、踏査、解体・調理実習に参加しました！

日時： 2022年7月7日、27日 聞き取り調査

11月27日 富山県埋蔵文化財センター資料調査

11月28日 生態観察、猟場見学

2023年1月18日 解体調理実習

場所： 関高等学校、長良川流域の猟場、富山県埋蔵文化財センター

指導： 足立公成さん（そば処あだち）

参加： 自然科学部鳥類研究班（4名）

趣旨： マガモ猟師からの聞き取り、マガモの生態観察や縄文時代の出土遺物の調査、解体・調理実習への参加など、マガモに関わる多方面からの研究を行う。

◇ 調査の経緯

学校近くの蜂屋川（長良川水系）でマガモ猟が行われていることを知った我々は、猟師の協力を得て、聞き取りや生態観察、仕掛けの現地踏査を行うことにした。「マガモの生態や河川環境と、ワナの設置や操作などの猟師の行動がどう関わるか」をテーマに記録を残し、ヒトとマガモ、河川環境との関わりを考察することを研究目標に掲げた。

【マガモの生態】 マガモはカモ目カモ科に分類される鳥類の一種で、岐阜県の河川や湖沼には11月ごろ飛来し越冬する。オスは体部が淡褐色、頭部が緑色を呈し、メスは全身褐色なので判別しやすい（右写真、カモ類の観察）。夜間、水草の葉や茎、種子などを食べる。猟師は習性を利用しワナを仕掛ける。

【猟師の足立公成さん】 40年前からマガモのワナ猟を始める。蕎麦屋を営み、自身で捕らえたマガモをそばき店に出す。捕獲から解体、料理提供まで行う猟師は、県内では足立さんのみである。



【無双網の製作と設置】 人通りの少ない川岸を選び、高さ1.8mの竹竿2本に長さ10mの網を張る。竹竿と網は浅瀬に10cm程度沈める。竹竿の基部は川底に固定し、頭部にはワイヤーを取り付ける。竹竿の一方はあらかじめ近くの川底の杭にワイヤーで固定し、もう一方の竹竿は100mほどの長いワイヤーで待機場所と結ぶ（左写真、ワナ設置の様子）。

【餌付けと見極め】 マガモは夜半に採食する習性があるので、餌となる米を猟場にまき、気長に群れをおびき寄せる。91日間の猟期のうち、約60日間、毎日25kgの米を水辺にまき続ける。減った餌の量でマガモの採食の具合を判断し、猟を行う頃合いを見極める。

【マガモの捕獲】 マガモは警戒心が強い。ワナから100mほど離れた場所に、竹竿に結んだワイヤーを引き込みマガモの到来を待つ。稲穂をリール系に結び付け、一方に鈴をつけマガモの到来を察知する。頃合いを見てワイヤーを一気に引き、沈めた網を梃子の原理で起こして群れに被せ「一網打尽」にする。猟期91日間のうち猟を行うのは20~25回程度、捕獲するマガモは200~300羽に達する。

【現地踏査】 猟場の踏査を行った。人通りはほとんどない。猟場のすぐ上手は川幅がせまく猟場のあたりはやや広い。警戒心の強いマガモが集まりやすい地形を選んでいることがよ

くわかった。

【捕殺と食肉処理】 網猟で捕獲した個体は傷が少なく味が良いと言われる。網にかかったマガモはその場で首を折って殺す。家に持ち帰り羽毛をすみやかにむしる。次に、腹に突き出した胸骨に沿ってささみをはずし、鎖骨を真ん中で切りあばらに沿って肉をはずす。

【考古学からみたカモ猟】 水辺に多数飛来するカモ類を、狩猟採集民が見逃すとは考え難い。縄文時代の活用例がないか、岐阜県やその周辺部で探したところ、富山県小竹貝塚の事例があることがわかった。幸いにも富山県埋蔵文化財センターで出土した遺物や鳥骨を見学する機会を得たので、以下に学んだこと、考えたことを記しておく。

【富山県小竹貝塚とカモ類の骨】 小竹貝塚（縄文前期）は、海岸線から4km離れた位置にある。当時は、縄文海進によって集落のすぐそばまで汽水域が迫っていた。小竹貝塚人が水辺で鳥猟を盛んに行っていたことは、おびたしい鳥骨出土数からみて明らかである。狩猟対象の中心はカモ類であり、富山市、富山県文化振興財団の調査とともに、検出された鳥骨全体の50%以上がカモ類であった（右写真は小竹貝塚出土のマガモ上腕骨、左写真は足立さんが解体したマガモ上腕骨）。



【どうやって捕獲したか 弓矢かワナか】 縄文人がどうやってカモ類を捕獲したか。直接的資料はない。貝塚から石鏃や根ばさみは出土しているが、弓矢より複数捕獲できるワナの方が効率的であるように思える。ただし、大量の撒き餌が必要な無双網猟を縄文人が行えたのか、北陸地方で行われている投げ網猟のほうがより適していたのではないかなど、様々な疑問が生じた。低湿地遺跡出土の木製品の中に、ワナの仕掛けに類するものがないかを含め今後も探究していきたい。

【調査を通じて考えたこと】 足立さん、小竹貝塚人の双方にとって、カモ猟は重要な季節生業である。群れで行動するカモ類は、ワナを使えば効率よく捕獲できるし栄養価も高い。猟場選定や捕獲技術の開発は、マガモの習性に基づくものであるから、足立さんと小竹貝塚人の行動や認知には類似点があると思われる。

足立さんは、猟期の間、相当の時間と「執念」をワナ猟に費やす。その一方、「40年猟を続けていても、猟期最初にマガモを殺す時には、ためらいの気持ちが起こる」と言う。教科書には、土偶・石棒・抜歯・環状列石・アニミズム等、多様で複雑な縄文人の精神世界に関わる記述がある。縄文人が行った様々な呪術や儀礼の中には、執念（豊猟祈願）やためらい（生命への敬い）に関わるものもあるかもしれない。今後も、民俗例と考古学資料の比較検討、マガモを含む鳥類の行動観察を続けていきたい。（右写真、猟場の様子）



【協力】

足立公成氏（そば処あだち） 富山県埋蔵文化財センター

【参考文献】

- ・『小竹貝塚発掘調査報告』（富山県文化振興財団 2014）
- ・『小竹貝塚』（富山県埋蔵文化財センター2022）